

## 落ちこぼれのつぶやき

第4期 成田 正路 (1956年卒業)

四期生の落ちこぼれなる故、原稿執筆を遠慮していたのだが、落ちこぼれであっても貴方がアメリカ科のOBであることには間違いない。執筆の権利はある、いや、むしろ落ちこぼれとして原稿を残す義務があるとの会長の強い指示があり、恐る恐るメールに向かうことにした。

教養学科を選ぶについては、さほど迷うことはなかった。地理のサークルに入っていた私は農村調査にもたびたび参加したが、それは地域、社会の成り立ち、変遷、その意味するところに関心があったからで、村や町よりも大きい一つの国を対象にする教養学科の地域別研究は、まさに魅力のある分野だった。そしてアメリカ科、当時すでに強い力を付け、国際社会に大きな影響力をもっていたアメリカを色々な角度から眺め、探ることは、大いに興味を引く対象だった。合唱の仲間の女性から「なんでフランスにしなかったのよ」といわれたのを覚えている。そのころ世間的には、外国といえばヨーロッパ、とくに女性にとってはフランス、パリだったのだ。

「学生と雑巾は絞れるだけ絞れ」一中屋健一先生の厳しい指導については、多くの先輩から聞いていたが、授業が始まると、その厳しさは予想をはるかに上回るものだった。遅刻や授業中の私語は勿論厳禁。授業のたびに何冊もの分厚い本を抱えてきて、お前は○ページから△ページまで、お前は「CHAPTER 3」などと学生に手渡すアサインメント。当然ながら英文である。知識もなく、語学力も足りない身にはまさに難行苦行であった。中学、高校、大学を通して、授業に一番熱心に取り組んだのは、中屋先生のアメリカ史の授業だったといえる。振り返ると数多くの高名な歴史学者の文章に接したものである。

ある日のアメリカ科研究室。本棚の前で本を探していたら、後輩のA君に呼びかける中屋先生の野太い声、「おいA、カリフォルニアで起こった日本人排斥運動のことは知っているな」「ハイ、1924年日系人移民を禁止する法案が通りました」「排日の背景にあったのは何だ。日本人はなぜ嫌われたのだ」「チープレイバーです」「そうだ、その通り」そこで先生の声が大きくなった。「それを知っていながら、お前はなぜおれが世話した家庭教師の報酬を、約束よりも安く引き受けたのだ。それだから日本人は嫌われるんだ」

A君によると、先生が先方との間で、当時の標準よりは高い報酬を決めていたことは聞いていたが、先方の母親から「おいくらにしましょうか？」と改めて聞かれ、動転して世間並みの額を口にしたということだった。一方中屋先生は、歴史を学ぶということは、書かれている事実を知ることが基本だが、その上でなぜそうなったか、背景、その時の情勢、事情などを調べ、記された事実の裏に隠された何か、その真実にまで踏み込む必要がある。そして学ぶべき点、反省すべき点があれば、現在に通じる教訓も見つかるはずだと話しておられた。チープレイバーが排日につながったという歴史の教訓を自分の行動に生かせないようでは歴史を学ぶ意味がないと聞いたのだと思う。あの日の研究室の場面は、今も私の胸に焼き付いている。

卒業後は記者となった。記者は目指していた仕事。小さいころからジャーナリズムに強い関心を持ち、中学、高校を通して新聞部に属していた。あだ名は「ナリシン」。そのころ記者といえば新聞記者。私も新聞記者を考えていたが、NHKも数年前から記者の採用をはじめたことをギリギリの段階で知り、願書を出した。試験を受けたマスコミ各社の中で、真っ先に採用が決まったのがNHK。私のNHK人生、記者生活の始まりである。

その年、同期では三神正人くん（故人）がテレビ東京に入社した。当時アメリカ科では野中勝（1期）、市谷担（2期）、の両先輩が東京放送で活躍されていたが、NHKでは私が第一号。教養学科なのになぜ学校の先生にならなかったの？などと訊かれたこともあった。そんな時代である。後年ロンドン特派員の内示を受けたとき「私は海外勤務を希望していない。英語にも自信がない」と渋っていると、人事担当は、君は英米学科なのになぜためらうのだと怪訝な顔。私はアメリカ科ですと答えたら、相手はキョトンとしていた。卒業して14年目、教養学科についての世間の認識はこんなものであった。

NHKには、その後1期の中西尚道先輩が、世論調査の権威として移ってこられ、さらに深田恒夫（5期）、小林千鶴子（7期）、出先昭（8期、故人）、川口雅一（10期）、野村正昭（11期）、と心強い後輩たちが入ってきてアメリカ科の知名度と評価を高めてくれた。感謝、感謝。NHKアメリカ科OB会と称して、飲みながら語り合う集いも何回か開かれるようになり、NHKの関連会社の幹部として派遣されてきた吉岐誉夫（3期）先輩も加わって一層話が弾んだ。

NHKでは地方勤務の後、東京、ロンドンで経済取材を担当、最後の8年は解説委員として過ごしたが、ニュースをせきとめ、事実確認、原因動機の解明、

表に出されていない裏の動きを探って真実に迫るという点で、中屋先生の教えが大いに役に立った。

厳しかった中屋先生だが、授業を離れたところではやさしい気遣いを忘れなかった。ご自身が地方に出かけたときは、時間をやりくりしてその地で働く卒業生に声をかけるよう勤めておられた。福岡では夕食をごちそうになり、出張先の名古屋で偶然出会った時には、10期の岩野一郎君の講演があるので聴いてやってくれと頼まれた。特派員として3年過ごしたロンドンにも何回か来られ、アメリカ科以外の教養学科OBも仲間に加わって、懐かしい中屋節の励ましを受けた。

忘れられないのは1972年の春、私がヒースロー空港に出迎え、我が家で朝飯をとってもらったが、たまたまその直前に川端康成氏自殺の報が入っていた。そのことを先生に伝えると食事を啜るのもそこそこに あちこちに確認と対応の電話をかけまくっていた。先生はそのころペンクラブの副会長をしておられたと記憶している。

私は4期の落ちこぼれではあったが、アメリカ科に在籍した期間を通して不愉快なことは全く思い出さない。落ちこぼれ故の感度の鈍さのせいなのか、それともまだまだ絞られ足りなかったのかもしれない。いずれにしても中屋先生をはじめ、アメリカ科でご指導を受けた諸先生、先輩、同僚、後輩には、ずいぶん助けていただいた。こうした出会いがなかったなら その後の私は4期生の落ちこぼれどころか人生の落ちこぼれになっていたかもしれない。皆さんにはただただ感謝あるのみ。

教養学科の草創期、中屋先生の時代を知らない後輩の皆さんにはもうしわけがないが、私のつぶやきは、中屋先生の思い出が中心になってしまった。そのころのアメリカ科は中屋先生を抜きにしては語れないのです。教養学科を立ち上げ育てるにあたってのパイオニア精神、厳しい指導、事実の裏の隠された真実に迫る探究心、厳しさの中に隠された教え子に対する思いやり、これらは時が移り人が変わっても、新しい価値を加えていきながら、アメリカ科の底流に流れ続けているのだと思います。後輩の皆さんがバトンタッチしながら受け継ぎ、発展させていくアメリカ科の明るい将来に大いに期待しています。

最後にもうひとつつぶやき。落ちこぼれの身ではあったが、私には他の人になんて誇らしい？体験がある。東京大学を総代の次で卒業したのだ。卒業式の日、少し遅れて安田講堂に入るとなんと席は一杯。卒業式を欠席するわけにもいか

ず、ようやく見つけた席が最前列、演壇に向かって左。席の左は通路になっていて、その左にはまた椅子が並んでいる。やがて卒業証書授与、最前列右のほうから各学部総代が一人ひとり名前を呼ばれて立ち上がる。しまった、ここは総代席につながっている。学部数を数えると私の右隣までは来そうだ。右隣で終わったら格好悪いな。さらにもう一人通路を挟んだ席が立ちあがったら---いまさら逃げ出すわけにもいかない。まさに頭が真っ白。恥ずかしいときには耳の先から熱くなることを初めて知った。総代は私の右隣でストップ。私はそのままうつむいて座っていた。

総代の次で卒業。誰にも真似できない誇らしい（恥ずかしい）体験。落ちこぼれといわれた私ですが、そんなに馬鹿にしたものではないのですよ。